
僕は神を知っている

赤井葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は神を知っている

【Nコード】

N8981Z

【作者名】

赤井葵

【あらすじ】

この世界に神を信じている人はどれだけいるだろうか？新庄界という少年は信じていない側の人間だった。だが、ある事件をきっかけに新庄界の中に神が入り込み、神が入り込んだ新庄界は「神の器」として悪魔の討伐をしなければならなくなる。新庄界の平凡な日常は崩れ去り、新たな物語が今、動き出す。

第一話〜祈願〜(前書き)

こんにちは。赤井葵です。

今回この「僕は神を知っている」が初投稿です。まだまだ未熟で乱文になってしまうこともあると思いますが、どうか温かい目で読んでください。

第一話〜祈願〜

新庄界：ごく普通の高校生。特に目立つものがないことにコンプレックス

を抱いている。

花岡すみれ：色白で肩ぐらいまでの茶髪の女子高生。界と同じクラス。い

ろいろあって界の初めての友達となる。

へファイストス：炎と鍛冶の神。

ープロローグー

宗教の信者を除いてこの世界に神や悪魔といった類のモノがいると信じている人はどれくらいいるだろうか。

おそらく、ほとんどの人が信じていないと思うが、誰しも一度は信じてもない神に祈ったことがあるはずだ。自分ではどうしようもなくなつたとき、頼ってしまうのは間違いなく神だ。

僕も頼つた。頼るしかなかった。そして、願つた。願うしかなかった。必死に願つた。僕にはそれしか出来なかつた。僕には一人一人も助ける力すらなかつた。だから願つた。「力を貸してくれ」と。

第一話〜祈願〜

僕の名前は新庄界。15才の高校一年生。いや、正確には入学式がこれだからまだ高校一年生ではないか。僕はここ新木市でもそこそこの進学校に入学する。志望理由は単純に家から徒歩で行ける距離にあるということだ。とくにこの高校でやりたいことはない。

というより、元々友達も少ないのでやれることも少ない。学校生活は友達なしでも問題はないのだ。(検証済み)

歩いて10分後、学校の校門が見えてきた。

「それにしても、この学校、私立だとしても綺麗すぎるだろ。」

名前も聖秀学園とか格好いいし。」

僕は学校に見惚れていた。だから気づかなかった。背後から自転車が猛スピードで突進してきていることに。

「ぐっ!!」

背中に大きな衝撃が走った。僕は見事に前方に飛ばされ、頭から地面に落ちた。

「あー……ここで死んでしまうのか……できることなら、もう・
少し……生きて……」

「……ここは?」

目の前には真っ白な天井が広がっていた。どうやら、どこかの部屋のようにだ。

「やあ、やっと目が覚めたようだね。」

白衣を纏った白髪のおじさんが部屋の隅に座っていた。

「あのう、ここは?」

「見ての通り、病院だよ。君は奇跡的に気絶しただけで、怪我もほとんどしていなかったんだよ。」

「じゃあ、僕、生きてるってことなのか……?」

「はははっ、そういうことだね。最近の若い子は頑丈だよ。」

あれだけ飛ばされて頭から落ちたのに僕はほとんど無傷に近かった。日頃、運動もしていないのに頑丈だとは思えない。一体何が……

「とりあえず、今日のところは大丈夫そうだし家に帰っていいよ。」

また何かあったらここに来なさい。」

「あ、はい、分かりました。ありがとうございます。」
僕は不思議に思いつつも、この病院をあとにしようと病室から出た。すると病室の前に少女が座っていた。

「今日は自転車で引いてしまつてごめんなさい。ほんとに怪我がなくてよかつたです。」

「どうやら、この子が僕を引いたようだ。」

「大丈夫。気にしないで。ところで、名前は？同じ高校の制服だね？」

「あ、私は華岡すみれっていいです。ちなみに、一年B組です。」

「僕は新庄界。華岡さんよろしく。」

「はい、よろしくお願ひします。同じクラスっていうのも奇遇ですね。」

「そうなの？じゃあ、僕も一年B組なんだ。」

「はい。私、引越してきたばかりで友達もいないので、こうやって話せる人がクラスにいてよかつたです。」

二人で話しているといつの間にか病院の外に出ていた。

「じゃあ、私、こっちなので。また明日。」

「うん、じゃあね。」

もう空はオレンジ色になっていた。住宅地内で遊んでいる子どももみんな家に帰る頃なので、辺りは静まりかえっている。

病院は家の近くにある病院だったらしく、家に着くまで時間はかからなかつた。

「ただいま。」

鍵を開けて家に入ると、いつもは仕事でまだ帰つてこないはずの母さんが家にいた。

「あら、おかえりなさい。病院行けなくてごめんね。母さん、今帰つてきたの。」

「別にいいよ。それより、なんでこの時間に居るの？」

「会社が火事になっちゃったの。だから、しばらくは仕事お休み。」
「火事？大変だったね。母さんが無事でよかったよ。」
「あら、ありがと。」

この年になると親にお礼を言われるだけで恥ずかしくなるので、僕はすぐに自分の部屋に向かった。

「はあ、今日はトラブル多いな。」

僕はその時、微かに不安があった。その理由はわからない。だけど体がそう感じるのだ。

「少し寝よう。疲れてるのかもしれない。」

僕はベッドで大の字になって目を瞑った。本当に疲れていたのか、すぐに眠りについた。

「……い……か……い」

誰かが僕を呼んでいる。

「誰？」

「貴様の願いはなんだ？」

「僕の願い……？」

「そうだ」

果たして、この僕に願いなどあるのだろうか。僕に望むものはない。仮に、望むものがあつたとしても、僕なんかの願いは叶わない。

「僕に、願いは、ない。」

「そうか。だが、いずれどうしても叶えたい願いが出てくるだろう。」

「

「……なんだ、夢か。」

もうすでに時間は9:00を過ぎていた。

「飯食べ損ねたな……」

我が家ではだいたい7:30から夕食を食べると決まっている。と

は言っても家に居るのは母さんと僕だけだ。親父は海外に出張に行ったまま行方不明になっている。僕は親父がどんな仕事をしているのか知らないの、親父には不信感を抱いていた。

母さんも親父のことをよく知らないらしい。母さん、よく結婚する気になったな。

「適当にカツプ麺でも食べるか。」

僕は自分の部屋から出て、一階のリビングに向かおうとした。

「バリントッ!!」

家中にガラスが割れる大きな音が響いた。

「きゃああああ!!!」

「!?!」

母さんの悲鳴が聞こえた。僕は急いで母さんのいるリビングへ向かった。

「おい・・・なんなんだよ・・・これ」

僕がリビングに着いたとき、母さんが浮いていた。いや、持ち上げられていた。3メートルはあり、人型の獣のような黒い化物に。僕は状況が理解出来なかった。それどころか、身体が動かなかった。

目の前で母さんが殺されかかっているのに、助けようとする事も出来なかった。

「・・・か・・・い・・・に・・・げ・・・て」

母さんは首を締められている中で僕に言った。母さんは僕を必至に逃がそうとしている。それでも僕の身体は全く動いてくれなかった。

化物が母さんの首を締めている手の力を強めていく。

母さんの抗っていた手が動かなくなっていた。

「・・・助けてくれよ・・・誰か助けてくれよ・・・なんでもするか・・・母さんを助けてくれよ!!!」

僕は力の限り叫び、神に願った。

「その願い、叶えてやろう」

夢の中で聞いた声がした。

そして僕の左手には剣が握られていた。それに気付いた時には身体が勝手に動き、化物の背後に回った瞬間、僕の左手の剣が化物を貫き、化物を一瞬で燃やし尽くした。

「か、母さん！！しっかり！！」

僕はまだ理解出来ず混乱していたが、母さんが危ないのは理解出来た。

「界・・・なのね・・・逃げなさいって・・・言ったのに・・・」

母さんはこんな状況でも僕の心配をしていた。

「ごめん、母さん。身体が動かなかったんだ。それに、母さん一人置いて行けないだろ。」

「そう・・・ありが・・・と・・・う・・・」

「母さん!？」

母さんはその場で意識を失った。

「まだ意識はないみたいだ。いつ目覚めるか分からない。命に別状はないとも言えない。でも大丈夫。この私が何とかしてみせるよ。」

さっきの白衣を着た白髪のおじさんは、病院のロビーに座っている僕を慰めるように言った。

「私は、日渡だ。これでも一応、医学界では有名な医者だよ。」

「そうだったんですか。」

「だから、私に任せなさい。必ず、君のお母さんは救って見せる。」

僕はその言葉に返事をせずに病院をあとにした。

僕は普通に生きることすら認められていない人間なのかもしれない

い。僕は不幸でないといけないのかもしれない。僕という人間はこの世界で必要とされていない存在なのかもしれない。だったら、いいつそいない方が・・・

（それは許さん）

「え・・・夢の中の・・・」

（そっだ）

「いったいあなたは誰なんだよ。どこにいるんだよ。」

（私は、神だ。名はヘファイストス。今は貴様の中にいる。）

「神？僕の中にいる？どういことだよ。」

（貴様、自分で願っただろう。助けてくれ、なんでもするからと。

だから、その願いを叶えたのだ。）

「ちよつとまつて、じゃあ、なんで僕の中にいるんだよ。」

（貴様がなんでもすると言ったから、神の器になってもらったのだ。

「神の器？」

（そう。神は簡単にはこの世界に降臨することはできない。神が降臨すれば、この世界は神の力に耐えられず、破滅してしまう。そこで神の器が必要になる。神はその器に入ること、自身の力を抑えることができる。）

「でも、なんで僕なんだよ。」

（神の器は誰でもよいというわけではない。強く願った者が器となる。）

「なんだよそれ・・・」

僕は歩きながら、自分はとんでもないモノに願ってしまったのだと気づいた。僕はこれから、どうすればよいのだろう。とりあえずは家に戻って寝るのが先だ。

（今日は貴様も疲れているだろう。今日のところは休め。明日続きを話そう。）

僕はその言葉を無視した。家に着くとすぐさま自分の部屋に入ってそのまま眠りについた。

第一話〜祈願〜（後書き）

どうだったでしょうか？

短いと感じた人もいると思います。なるべく期間を空けずに投稿していきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

第二話〜役割〜（前書き）

こんにちは。赤井葵です。

「僕は神を知っている」第二話です。一話の題名が二字だったの
で二話も二字にしてみました。

これから二字縛りにしようかなあと思っています。それでは、第
二話もお楽しみください。

第二話〜役割

第二話〜役割

(・・・き・・・ろ)

誰かが何かを言っている。

「なんだよ。僕は眠いんだ。」

(起きろ!!)

「うわっ!! な、なんだ!?!」

(もう、朝だぞ。)

どうやら、自称神が僕を起こしたらしい。ということは、昨日の出来事は夢ではないみたいだ。

(何をぼさつとしている。今日も学校あるだろ。)

「今思ったんだけど、僕、お前と話す時、実際に話さないといけないの?」

(そんなことはない。言いたいことを心の中で言えばよい。)

(なるほどね。)

実は内心、独り言みたいで嫌だなと思っていたが、その心配はしなくていいみたいだ。

母さんがいない今は朝食はちゃんと食べることができない。これは僕が料理できないわけではなく、朝早くに起きられないのが原因である。

「今日はヨーグルトだけでいいや。」

(そんなので大丈夫なのか。)

(僕、少食な方だから。)

さっさと食べ終わり、身支度を始めた。

「これなら、走れば間に合いそうだ。」

全ての準備を終えるのにシャワーを浴びたおかげでいつもより時間がかかった。

「じゃあ、いつてきます。」
誰もいない家にそう告げた。

「はあ・・・はあ、日頃運動しないとこれだけで疲れるな・・・」

(弱いなあ。)

(うるさいよ。)

神はいちいち口を挟んでいる。今だ自分の心に直接話しかけられるというのに慣れていない。

それにしても入学式に出ていなかった僕はクラスで目立ってしまっただろうか。それだけはなんとしても避けたい。僕は静かに学校生活を送りたいのだ。

(それは難しいだろう。)

(おい、人の心読むなよ。)

いや、もしかして言いたいこと以外も筒抜けなのか？違うと信じたい。

今、僕は教室の前にいる。なかなか教室に入る勇気が出てこない。みんなと一緒に入学式に出ていければ話は別なのだが、初日休むだけで、もはや転入生である。こうしている間に、時間は過ぎていく。

「よし、行くか。」

教室に入った瞬間、みんなの視線は一斉に僕に集まった。きっと今の僕の視聴率100%だろう。

僕は気にしないように黙って席に座る。やはり新入生の机には名前が書かれたシールが貼られていた。実にありがたい。これがなかったら、「僕の席どこ？」と聞かないといけない。

僕が席に着いた直後に朝礼のチャイムが鳴り、クラスの皆が席に着き始めた。

「おはようございます、新庄くん。」

どうやら、左隣の席は花岡さんらしい。

「おはよう、花岡さん。」

花岡さんは挨拶を済ませると前を向いて先生の話聞いていたので僕も黙って前を向いた。

「あー・・・疲れた・・・」

（そんなに疲れる内容だったか？勉強なんてほとんどなかったではないか。）

急にヘアアイストスが話し始めた。やはり少しは配慮してくれていたのだろう。そうしてもらわないと困るのだが。

（だからだよ。普通に授業やってたら、誰とも話さなくていいだろう？でも、クラスの決め事とかは周りの人と話し合わないといけないじゃないか。）

（花岡とかいうやつとしか話してないではないか。）

（まあ、そうだけど。）

神との会話を終え、僕は食堂に向かった。ここ聖秀学園の食堂のメニューは結構豪華だという噂がある。そうなるかと確かめたくなるのが人間だ。少し歩くペースを早めた。

食堂はメニューだけでなく、内装まで豪華だった。食堂内にはお茶することができる場所までついていた。これほど豪華な食堂はなかなかないだろう。

「さて、どれにしようか・・・」

品揃えがよすぎるというのも意外と困りものだ。

僕は迷った末、定番のカレーライスを注文した。

「・・・なんだこれは・・・」

見た目はごく普通のカレーライスなのだが、味が全然違う。カレーライスを超越したカレーライスみたい感じた。とにかく旨い

「あ、そのカレーライス、美味しいって評判ですよ。」

僕が夢中に食べていると花岡さんが自分のお昼を持って席に座った。
「相席いいですか？」

「うん、全然いいよ。ところで、その、敬語やめてくれないかな？
そういうのあまり好きじゃないんだ。」

「分かった。じゃあ、改めてよれしくね、新庄くん。」

花岡さんは満面の笑みで言った。花岡さんはおとなしい人だと思っ
たけど、笑顔がとても似合っている。

「どうしたの？早く食べないと昼休み終わっちゃうよ？」

「あ、ぼーっとしてた。」

本当は花岡さんの顔を見ていたんだけど。

僕たちはその後、世間話をして昼休みを終えた。

(午後の授業は一時間だけなんだな。)

(今日は始まったばかりだから特別らしい。)

午後の授業は普通の授業で数学だった。僕は数学が結構好きで得意
だったので、苦ではなかった。

(後で話がある。昨日の続きだ。)

ヘアリストスはいつもより少し低い声で言った。

(分かった。)

僕は最小限の返事だけをした。

僕は下校時刻になるとすぐに帰宅した。正確にはすぐに下校したか
ったが、花岡さんが「一緒に帰ろう。」と誘ってきたので、断る作
業で多少時間を使った。

(で、昨日の続きを話してくれよ。)

僕は学校から少し歩いてから言った。

(そうだな。貴様には神の器としての仕事をしてもらわないといけ

ない。)

(なんだよ。その仕事っていうのは。)

(まあ、簡単に言うと、悪魔の討伐だな。)

(・・・悪い、もう一回言ってくれ。)

聞き間違えだと信じたかった。

(だから、悪魔の討伐だ。)

(それ、本気で言ってるのか?)

聞き間違えではなかった。ヘファイストスは確実に”悪魔の討伐”
と言った。

(もちろん本気だ。貴様には神の器としてやってもらう必要がある。
これは義務だ。)

(なんでだよ。僕は絶対そんなことしないぞ。)

悪魔の討伐なんて死んでもやりたくなかった。

(貴様には断る権利はない。貴様は私と契約を交わした。貴様の願
いを叶える代わりに貴様は私の器になるというな。)

(・・・)

何も言えなかった。ヘファイストスの言うことは筋が通っていた。

(それでも断るといっているのであれば、願いを取り消すしかないな。そ
れはつまり貴様の母親はあそこであの悪魔に殺されていたけとにな
る。さて、どうする?)

(!?!?・・・分かったよ。)

さすがに、母さんが殺されるのは嫌だった。・・・?まで、今こい
つ、悪魔って言った?

(おい、今、あの時家に居たのは悪魔って言ったのか?)

(あれは悪魔だ。下級悪魔だな。)

(それはつまり、僕は既に悪魔を倒しているのか?)

(そういうことになるな。)

僕は既に悪魔を討伐していた。

(じゃあ、あの時の剣と炎はお前の力?)

(そうだ。貴様はあの時には既に神の器だ。)

あの時は混乱していてよく考えられなかったが、今考えると全てこいつの力だと気付いた。

（貴様の仕事は神である私の力を使って悪魔を討伐することだ。悪魔は私が感知できる。貴様がわざわざ探すことはない。）

（俺にお前の力なんて使いこなせないと思うけど。）
普通に考えて神の力なんて使いこなせるはずがない。

（普通の人間は使いこなせない。だが、異常な人間ならどうだ？貴様は神の器になった瞬間から使っていたらう？貴様は異常な人間なのだ。）

へファイストスは僕が異常だと言った。これといって特に目立つ特徴も特技もない平凡な僕を異常だと言った。別に褒められてはいないのに何故か少しだけ嬉しかった。

（・・・じゃあ、やれることはやるよ。）

（それでこそ我が器だ。）

この時から僕の神の器としての物語は動き出した。

第二話〜役割〜（後書き）

第二話どうだったでしょうか？まだ序盤ということもあり、いまいち盛り上がっていませんが、今後戦闘シーンも出てくるので楽しみにしててください。

第三話　始動

第三話　始動

僕は悪魔の討伐を言ったものの正直、悪魔に対してどう戦えばいいのか分からない。適当に戦うだけではきつと勝てないはず。ヘファイストスは戦い方を教えてくれるだろうか。

僕は夕食を作っている時そんなことばかり考えていた。今日の夕食はカツ丼だ。美味しい上に作るのは簡単という素晴らしい料理だ。

「じゃ、いただきます。」

一口目からガッツリ食べた。

「今日はなかなか美味しくできたな。」

誰も食べてくれる人がいないので自画自賛した。僕はそれから黙々とカツ丼を食べた。食べ終わると食器を片付けて一服するためにソファーに向かった。

(・・・界)

ソファーに座ろうとした時ヘファイストスが僕を呼んだ。

「何？」

(早速お出ましのようだぞ。)

「・・・悪魔か。」

(ああ。)

意外と早く来たことに僕は驚いた。悪魔というのは結構いるのだから。

「場所は？まさか住宅地内じゃないだろうな？」

(・・・いや、貴様の学校だ。)

「学校!？」

自分に関係のある場所に驚きを隠せなかった。

(この時間は先生とかいるんじゃないか?)

今の時刻 8:05

「多分、新学期の始めで仕事も少ないはずだからいないと思う。」
(よし、では、さっさと行くぞ。)

学校に辿り着くには5分くらいだった。案の定、先生方も帰った後らしい。

「はあ、はあ、悪魔はどこにいるんだ？」

(恐らく校内だ。)

僕はそれだけ聞くと校内を指して走りだした。

「夜の校内は暗くて見にくいな。」

夜の校内は月明かりがあっても暗く、今走っている廊下は月明かりのせいで妙に気味が悪い。

(・・・きた。)

へファイストスの声と同時に正面の曲がり角から黒い犬のような生き物が現れた。

「あれ、悪魔なのか？」

その生き物は赤い目で僕を見据えていた。

(あれはケルベロスの子どもだ。どうして、こんなところに・・・)

「? じゃあ、あれ倒さないといけないのか。」

ケルベロスの子どもは遠吠えをしてから僕に突進してきた。

「へファイストス！」

(分かっている。)

へファイストスの言葉に続くように僕の手の中に剣が現れた。

「はああああ!!」

僕は迷わず突進して飛びついてきた悪魔に剣を振りかざし、タイミングを見計らって振り下ろす。

剣は悪魔を真っ二つに引き裂いき、悪魔はすぐに蒸発するように消滅した。

「意外と呆気ないものなんだね。」

僕はもつと激しく苦しい戦いを想像していた。

（界！後ろだ！）

「えっ？」

後ろを振り返った時には既に遅く、僕の腹部に悪魔が突撃した。

「ぐっ！！」

あまりの衝撃に僕は後ろに飛ばされ、少しの間呼吸が出来なかった。

（しっかりしろ。油断するな。）

前を見ると同じ悪魔が四匹いた。どうやら、さっきの遠吠えは仲間を呼ぶためのものだったらしい。

「まだいたのか・・・」

（仕方ない。少し荒技を使うか。）

今度は四匹同時に突進してきた。

（界！剣を振りかざせ！）

僕は言われた通りに剣を振りかざした。そして剣の刃には炎が纏っていた。

（今だ！振り下ろせ！）

悪魔が飛びついてきたタイミングでヘファイストスが言った。

「うおおおお！！」

僕は力の限り振り下ろした。

剣を纏っていた炎は振り下ろした時に巨大化し、悪魔を一掃した。

「・・・すごい。」

（今のは豪爆炎といって、神術の一つだ。剣に纏っている炎の瞬時に巨大化させることができる。）

ヘファイストスは落ち着いた声で言った。

「でも、これヤバくないか？」

肥大化した炎は廊下ごと燃やしていて、廊下は全焼し焦げくさくなっていた。

（やり過ぎたかもしれんな。）

「早くここから逃げよう。誰かに見られたら大変だよ。」
警察に通報なんかされたら、僕の人生は終わりである。

(・・・ああ、そうだな。)

僕はヘアリストスの曖昧な返事に違和感を感じたが、気にせずその場を去った。

家に着いた時は10:00頃だった。僕はすぐに風呂場に向かった。

「あゝ動いた後の風呂は気持ちいな。」

日頃運動をしない僕はあまりこういうことを感じることは滅多にない。

(おい、貴様に聞きたいことがあるんだが。)

「こんな時なんだよ。」

(貴様、あれ程やる気なかつたくせに今日はノリノリだったじゃないか。)

悪魔討伐の話かと思っていたが、全く違った。

「それは・・・自分でもよく分からないけど、悪魔は倒さないといけないって思うんだ。だから身体が動いてしまっただよ。」

(そうか。)

ヘアリストスはそれだけ言うと黙っていた。

僕は風呂から上がり、歯磨きなどをした。

それを終えてからテレビを見ようとしたが、明日のためにも今日は寝て疲れた身体を休めることにした。

「あーよく寝た。」

翌日、いつもより早く寝たせいか通常の一時間も前の6:00に起きた。

「暇だしテレビでも見るか。」

朝のテレビはニュースが多かった。

仕方ないのでニュースを見ることにした。

「今朝方、東京都新木市内の高校から焦げくさい臭いがすると住民から通報がありました。警察の調べによると、学校の二階の廊下が全焼しているのみで、警察は調査を急いでいますが今は原因不明とことです。」

「……」

「どうやらもうバレしてしまったようだ。」

「やっとか。」

「捜査とかで学校はしばらく休みかな？」

その後連絡網が回ってきた。ニュースで出てきた事件の話だった。案の定、学校は休みになった。学校が始まる日時は未定らしい。

「学校も休みになったし、悪魔討伐に専念できるな。」

「はあ、やっぱりそうなるか。」

「ヘアリストスが何を言うかはだいたい予想できた。」

「だが、今回は待つのではなく探す。」

「なんで？」

「恐らくこの周辺には本来現界してはならない悪魔が現界している。」

「……」

僕はそれがどれだけ大変なことか察した。

「地獄の番犬ケルベロス。こいつだ。」

「じゃあ、昨日のやつはそのケルベロスの……」

「ああ、そうだ。だからケルベロス本体もこの周辺にいる可能性が高い。」

「……これからケルベロスを探すのか。」

「一刻も早くな。」

ヘアリストスがこれほど言うのだから、今まで戦った悪魔とは比べものにならないくらい強いのだろう。僕は不安だった。

「どうやって探す？」

「とりあえず、この周辺を散策する。私たちにやつが近づいたら指示を出そう。」

「じゃあ、外に出よう。」

外に出たのはいいものの、目的地がないとどこに行けばいいか迷ってしまう。

（ねえ、ほんとにこれでいいの？）

（あ、ああ。今はこれが最善だ。）

へファイストスの言葉はどこか頼りなかった。

（悪魔の活動は日没後だ。日の出ている間は現れない。）

（え……。っていうことは今は探しても意味ないんじゃない？）

へファイストスが何を考えているのかよく分からなかった。

（いや、やつが現れた形跡があるか探す必要がある。）

（へえーそうなのか。）

とりあえず僕は町外れの裏山に向かった。なんとなく僕のイメージでは裏山とかにいそうな気がした。

（このことかどうかな？）

（まずここから探すか。）

へファイストスは反対すると思っていたので僕は驚いた。

「ねえ、もしかして、君たち

ケルベロスさがしてる？」

「！？」

「！？」

正面の木の太い枝の上に若い男が立っていた。

だが、僕たちが驚いたのはその少年が言った言葉だ。

「……あなたは一体……」

「おっと失礼。僕はアキト。君と同じ神の器だ。」

男は自己紹介をすると木の上から飛び降りた。

「神の器!？」

「そんなに驚くことはないだろう? 神が一人とは限らないさ。」

「確かにヘファイストスもそんなことは言ってなかったけど・・・」

「君の相棒はヘファイストスなんだね。」

僕の独り言にアキトという男は反応した。

「ここで会ったのも何かの縁だし、協力してケルベロスを倒さないかい?」

はたしてここで会ったのは偶然だったのだろうか。

(今はこいつの誘いに乗るのも悪くない。)

(お前が言うなら・・・)

「分かりました。でもどこにいるのか分からなければ倒しようがないんじゃない?」

「大丈夫。今夜、新木市の中央公園に必ず現れるから。じゃ、今夜9時に中央公園入り口で待ってるよ。」

そう言っアキトという男は山の奥に消え去った。

(・・・あいつ、ただものじゃないな。)

やはりヘファイストスもそう思っていたみたいだ。

(僕もそう思う。)

僕の頭の中はケルベロスよりアキトという男のことでいっぱいだった。

第四話〜同盟〜（前書き）

ごめんなさい。第三話でアキトの紹介するのを忘れてしまいました。
・・・

なので、第四話で紹介しようと思います。

第四話〜同盟〜

アキト：金髪のロングヘアでさわやかな笑顔が似合うイケメン。年齢は不明。

第四話〜同盟〜

「あと30分か。」

僕はあれから裏山を後にして、暇つぶしに新木市一のショッピングセンターに向かった。「どうせなら食材でも買っていくか。」と思い、ショッピングセンター内のスーパーに入ろうとした時に偶然にも花岡さんと会った。何故か知らないが、どうせなら遊ぶ？という流れになったのでショッピングセンター内のゲーセンで遊んだ。僕はゲーセンには全く行かない人種だったことに花岡さんは驚いていた。今思うとこれはデートなのだろうか。いや、向こうはそんなこと考えてないか。

それにしても噂には聞いていたがあそこまで金がなくなるとは。ゲーセンは恐ろしいところである。それでも花岡さんの笑顔がたくさん見れたので良しとしよう。

楽しい時間はすぐ過ぎてしまう。

気がついた時には夕方になっていた。お互いお昼ご飯は食べていなかったなので（僕の場合は朝ご飯も食べていないが）最後にショッピングセンターの近くのファミレスで軽く食べることにした。ファミレスも家族以外の人と行くのはこれが初めてで少し嬉しかった。

ファミレスでも少し話し込んだので解散したのは午後6：00だ。

花岡さんも楽しかったのか、満足そうな顔で帰っていった。

まだお腹が空いていた僕は家には帰らず、その辺にあったコンビニ

で一番安いのり弁とコーラを買ってコンビニの駐車場でかき込むように急いで食べた。

特に急ぐ理由もなかったが、あまり駐車場に長居するのもどうかと思う。

それからはまだ全然早いですが、家に帰るのも面倒だったので、中央公園に向かった。

「一回家に帰ってもよかったかな。」

(公園のベンチですっと座って待つのも楽ではないだろ。)

公園に着いた時は7:00ぐらいでそれからずっと座っている。

この時間帯の公園にはほとんど人影が見当たらない。

「それにしても、アキトっていう人ちゃんと来るかな。」

(分からん。まだ信用は出来んが、こっちらも手掛かりはない以上、あそこでのつとくに越したことはない。)

僕から見てもあの人はケルベロスについて何かを知っているように見える。

「あ、そうだ、ヘアイストス、神はどれくらいいるんだ？」

気になって聞いたことを聞いてみる。

(残念ながら、複数いるということしか分からん。神にもいろいろな分野の神がいる。いちいち数えていたらきりがない。)

「ってことは、他にも神の器がいる可能性はあるんだよね。」

(ああ。)

僕はその時、あの人の中にはどんな神がいるのか気になった。

「ごめんね。待ったかな？」

いつの間にか正面にアキトという男が立っていた。

「あ、君の名前何？」

「・・・新庄界です。」

急に聞かれたので少し戸惑ってしまった。

「よろしく。界君。僕の話はアキトでいいよ。」

「じゃあ、アキトさんで。」

アキトさんは手を差し伸べてきたので、僕は握手に応じた。

「界君、ちょっと待っててもらえるかな。お手洗いに行きたいんだけど。」

「分かりました。」

「ごめん、ありがとね。」

そう言うとアキトさんは駆け足でトイレに行った。

「・・・アキトさん、意外といい人かもね。」

（どうか・・・）

へファイストスはまだ信用していないらしい。

（！？）

「どうしたの？」

（この感じは・・・ケルベロスだ！！）

へファイストスの声を合図にするかのように巨大な獣が僕の正面にあった木々を薙ぎ倒して現れた。

「これが・・・ケルベロス・・・」

ケルベロスはトラックを遥かに超える大きさで頭が三つあった。

（構える！界！）

僕の手にはいつの間にか剣が握られており、刃は炎を纏っていた。

「グアアアアア！！！！」

ケルベロスが叫んだ。

（いけ！！）

「くらえええええ！！」

僕は迷わずケルベロスに突っ込み、剣を振りかざした。

「豪爆炎！！」

瞬時に炎は巨大化し、振り下ろした剣を纏っていた炎はケルベロスを飲み込んだ。

「やったのか！？」

だが、そこにはケルベロスの姿は見当たらない。

「いない!？」

(上だ!！)

「上？」

気付いたときには既に遅く、猛スピードで落下してくるケルベロスから完全に逃げることは出来なかった。

「うわあっ!！」

直撃は免れたものの、着地した時に生じた風で10メートルほど飛ばされた。

「くっそおお・・・」

(早く立て!来るぞ!！)

ケルベロスは倒れている僕を待つてくれるはずもなく、僕に襲い掛かってきた。

「もう、ダメだ!」

僕は目を瞑って死を覚悟した。

「・・・あれ？」

ケルベロスがなかなか襲って来ない。僕が目を開けたとき、目の前にいたねはアキトさんだった。

「待たせたね。界君。」

「・・・ケルベロスは!？」

「あそこで足掻いているよ。」

ケルベロスは着地した地点で倒れていた。

(まさかアキトさんが・・・)

(だろうな。)

「界君はよくやった。次は僕の番だ。」

「でも!！」

「いいから。ここで休んでいてくれ。」

(界、ここはお手並み拝見といこうじゃないか。)
へファイストスまで言うので僕は休むことにした。

「グアアアアア!!!!!!」

ケルベロスは起き上がり、先ほどより大きく叫んだ。しかし、その叫びはすぐに消えた。今さっきまで僕の目の前にいたアキトさんも消えた。

「何が・・・」

ケルベロスはそこに倒れた。そしてそこにはアキトさんもいた。

「ふう、こんなものかな。」

アキトさんはそう言うのと僕の元に戻って来た。

「アキトさんってほんとに凄く強いんじゃないですか？」

「たまたまあいつに隙があったただだよ。あれ、いなくなってる・・・」

倒れたケルベロスはいなくなっていた。

「まだ生きてたか。僕もまだまだ甘いな。」

アキトさんは苦笑いをしながら言った。

(へファイストス、アキトさんどう思う?)

(悪いやつじゃなさそうだが、かなりのやり手のくせにどうして力を隠そうとしているのかが気になるな・・・)

僕はとくに気にならなかったがへファイストスは違うみたいだ。

「界君、君は神器同盟に加わる気はないかい？」

「神器同盟？」

「僕は各地で神の器を探しているんだ。もう既に何人が同盟に加わっている。これは悪魔の討伐をするにあたって協力し合うための同盟なんだ。」

「あの、僕なんかでいいんですか？足でまといにしかならないと・・・」

「もちろんだ。君は十分役に立つ存在だよ。」

僕はこの時今まで生きてきた中で一番の幸せを感じた。誰かに必要とされたことなんてあっただろうか。

「是非、お願いします！」

「ありがとう。これで君も神器同盟の仲間だ。」

この時は、僕は幸せしか感じていなかった。

第五話〜仲間〜(前書き)

明けましておめでと〜いいます。
今年も頑張っていきましょう。

第五話〜仲間〜

ゲンリユウ：短髪の大男。見た目は怖そうだが意外と優しい。戦闘員リーダー。23歳

ユイ：銀髪で長髪の少女。口数が少ないおとなしい子。戦闘員。5歳

リコ：茶髪でセミロングのポニーテール。元気で明るい参謀役。3歳

第五話〜仲間〜

「明日の朝6時にあの裏山の昨日会った場所にきてくれ。」

僕はあれから家に帰ってお風呂に入ってからすぐに寝ようとしたが、嬉しさのあまり興奮してたのか、なかなか寝ることが出来なかった。

「明日、6時か。」

明日が待ち遠しい。

現在時刻は午後11:30。

(貴様は浮かれ過ぎだ。)

(別にいいだろ。そういえば、神の目的って皆が悪魔の討伐なの?)

(いや、神はそれぞれの目的を持って現れる。だが、悪魔がいることはだいたいの神の妨げにしかない。だから、神は最初のうちに悪魔を排除しようとする場合が多い。)

(へえ、そうなんだ。)

(まあ、どの神も目的を口外することを嫌うがな。)

僕がヘファイストスの目的を聞こうとした時に言った。

それでも僕はヘファイストスの目的がどんなものなのか気になって仕方なかった。しばらく考えているとだんだん眠くなってきていつの間にかぐっすりと寝ていた。

(起きなくていいのか?)

「あと、五分だけ・・・」

(おい、待ち合わせあるだろ。)

「!!」

その言葉に僕は慌てて起きた。

時計を見ると時刻は5:45。

「大変だ!遅れちゃうよ!」

僕は急いで身支度を済まし、家を出た。裏山は近所なので走って五分もかからない。しかし、待ち合わせ場所は裏山の中だ。

「はあ、はあ、朝から走らないといけないなんて・・・」

(自業自得だな。)

裏山を登るころには大分疲れてしまった。

「やっと・・・着いた・・・」

「界君、お疲れ様。」

先に着いていたアキトさんは笑いながら言った。

「ごめんなさい、遅れてしまって。」

「はは、全然気にしてないよ。」

「アキトさんはまたもや笑いながら言った。」

「じゃあ、早速案内するよ。」

「え、どこにですか？」

「それは着いてからのお楽しみだよ。」

アキトさんは片目を瞑りながら言った。僕は黙ってアキトさんの後について行った。

「へえ〜こんなところに小屋なんてあつたんだ。」

アキトさんが案内した先に小屋があつた。

「もしかして、ここが目的地ですか？」

「いや、正確にはこの中かな。」

「？」

僕はその意味が全く分からなかった。アキトさんはゆっくりとその小屋の扉を開けた。

「何も無いんですけど・・・」

小屋の中は何もなく、殺風景だ。

「よく見て。あそこだけ床の色が違つてでしょ。」

部屋の隅の方の床だけ他の床に比べて色が濃い。

「ほんとだ・・・」

「よく見ててね。」

アキトさんはそう言うと、ポケットから何かのスイッチのようなものを取り出し、それを押した。その瞬間、隅の床がガクツと少し下がって左右に開いき、黒い床が現れた。

「うそ・・・凄い・・・」

小屋とは似つかないシステムが床には施されていた。

「さあ、行こう。」

そう言つてアキトさんは黒い床の上に立った。僕は誘われるようにその床に向かって歩いた。

僕が立つと黒い床はエレベーターのように下がり始めた。
下がること20秒、黒い床の動きが止まった。
アキトさんは僕より先に黒い床から降りて僕の方を向いて言う。

「ようこそ、我が本基地”デザリア”へ」

僕は夢を見ているのだろうか。果たしてこの21世紀はここまで発展していたのだろうか。

僕の目の前には地下都市（都市ではないが）と呼んでもおかしくない光景が広がっていた。目の前から続く大きな道は400メートルほど続いており、その道は正面に位置する大きな城のような建物に繋がっている。

「少し驚いたかな？」

アキトさんは笑いながら言う。

少しどころではない。本当に新木市の地下かどうかも疑わしい。

「ここで話すのもなんだし、行こうか。」

僕は言われるがままアキトさんについて行った。

「ごめんね、こんなに道がながくて。さっきのエレベーターは普段使わないから安心して。」

「あ、はい。」

僕はとっさに返事をした。

「ふう、到着。」

アキトさんはそう言って入り口の扉を開けた。

「さあ、入って。皆待ってるよ。」

言われたとおり入ると床には赤い絨毯があり、よく見る城の光景だった。

「こっちこっち。」

アキトさんは入って左にある扉の前にいた。

「心の準備は出来てるかい？」

僕が行くと、アキトさんは冗談混じりに言った。アキトさんはゆっくりと扉を開けた。

「皆、お待たせ。今日は新人を連れてきた。紹介しよう、界だ。」
そう言つてアキトさんは僕を前に出した。

「あの、新庄界です。よろしくお願いします。」

僕は丁寧に自己紹介をした。

「あれ、今日はナツミとケイはいないのか。じゃあ、皆自己紹介して。」

部屋の中央のソファーに座っていた大男が立った。

「うっす。では私から。私はゲンリュウだ。よろしく。」

次にゲンリュウさんの向かい側のソファーに座っていた少女が立った。

「私はユイ。よろしく。」

それだけ言うとまたソファーに座った。どうやら、大人しい子みただ。

最後は部屋の隅の机でパソコンをやっていた少女が自己紹介を始めた。

「私はリコ。リコでいいよ。よろしくね。」

パソコンをやっていたので大人しい子かと思つたが、元気で明るい子だった。

「今日から界君いや、界を含めた7人で活動する。」

アキトさんの雰囲気がいままでとは変わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981z/>

僕は神を知っている

2012年1月3日05時46分発行